

北前船ことも交流拡大プロジェクト 北前船と青谷

令和元年8月23日

「北前船」とは どんな船なのかな？

いつごろのこと？

- 江戸時代中期(18世紀中ごろ)～明治30年代

何をした船？

- 大阪と北海道を、日本海回りで商品を売り買いしながら往復した船(回船)。もともと、瀬戸内や大阪の人たちが、北にある日本海を回って来る回船のことを北前船と呼んだ、といわれる。

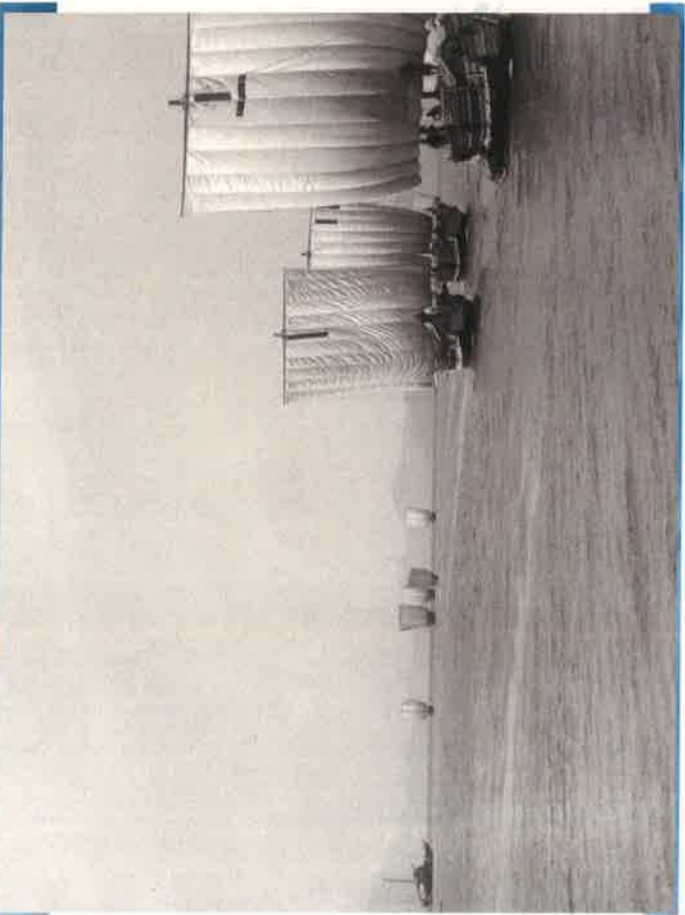
北前船の航路と主な寄港地



「北前船」の形と大きさ

- ①船の形は帆1枚で帆走する日本独特の和船(弁才船 ベざいせん)。
- ②大きさは様々。

千石積み(米約150ト)の一般的な船で、全長29.5m、全幅7.5m。帆の大きさは高さ20m、幅18mほど。



2500年物の「400石船」井才船 | © 1998



井才船の内部精密解剖図
BENZAIKEN



展覧航行できる日本唯一の大型和船「復元北前型井才船「みちのく丸」

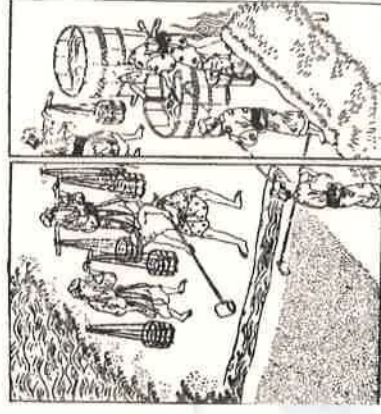
「北前船」は

どんなものを運んだのかな？

①下り（北海道行き）の荷物

（利益は千石船1航海で百両ほど：600～1000万円）

米、塩、綿花、木綿、古着、鉄、和紙(原料のコウゾ、ミツマタも)、石（瀬戸内各地で積み込む御影石）、陶磁器、漆器、ロウソクなどの生活用品、菓子、人形など



熊州赤穂の塩作り（『日本山産名産名物図会』より）

「北前船」は

どんなものを運んだのかな？

②上り（大阪行き）の荷物

（利益は千石船1航海で千両：今なら6千万円～1億円）

ニシン、昆布、俵物（干したアワビ、ナマコ、フカヒシ。長崎から中国への輸出品になる）など



「北前船」は 青谷とどんな関係なのかな？

- ・勝部川の河口には、江戸時代から明治時代にかけて芦崎（あしざき）港と呼ばれた港があり、たくさんの回船（かいせん・荷物を運ぶ船）が往来した。
- ・川岸には、回船問屋（船の積み荷の集配業者 船持ちの問屋もいた）が建ち並びにぎわった。
- ・芦崎の船には、東は能登半島（北陸）、北海道（松前）、西は石見地方（今の島根県）、そして大阪まで、大型船や中型船で行く船もあった。これらが、日本海を回る西回り航路の「北前船」といえる。



多くの回船が行き来した芦崎港

芦崎港は、芦崎川（今の勝部川下流）の河口を利用した天然の港である。すぐ西側に位置する丸山（標高69m）によって北西の風がさえぎられ、川岸に船を止めやすい条件を備えていた。

なお、大型船（北前船）は沖合に泊まり、はしけと呼ばれる小舟で荷物の積み降ろしをしたという。

芦崎港で積み下ろしされたものは？

- ・船積みされた商品：米、木綿（もめん）、和紙、イタヤ貝の干身（ほしみ）、海産物、酒など。
- ・特に、木綿は「青谷木綿」の名で大阪市場で盛んに取り引きされた。
- ・イタヤ貝の干身は、長崎へ運ばれ、長崎の中国人に大変好まれ、たくさん売れた。これにより、青谷ではイタヤ貝漁（貝がら漁）が盛んに行われ、漁師による「貝がら節」が唄（うた）われた。

芦崎港で積み降ろしされたものは？

- ・船から降ろされた商品：
 - ⇒ 出雲地方の来待石（きまちいし）
 - ⇒ 瀬戸内の御影石（みかげいし）
 - ⇒ ニシン粕（かす）
 - ⇒

何が残っているのかな？



湊神社（もと湊八幡宮）

江戸時代終りごろの青谷地区



青谷にある神社に残っているもの

青谷にある湊神社には、いずれも当時の回船問屋（回船の船主）などが寄進（きしん）した石灯ろうやこま犬、「おふね」と呼ばれる回船（北前船）の模型などが残されている。中に「航海安全」ときざまれた寛政（かんせい）13年（1801）に赤間関（あかまのせき 今の下関市）の商人から寄進されたこま犬がある。これは、回船（北前船）で運ばれたものであろう。



今も残る港町芦崎の町割り

江戸時代、港町芦崎（今の浜町、灘町、本町あたり）には、「八軒屋（はちけんや）通り」と呼ばれる通りがあり、金屋・関屋・鍵屋（かぎや）・大黒屋・舩屋（ますや）・松屋・浜崎屋・米屋の8軒の回船問屋が建ち並んでいたという。このあたりは、現在も、船主集落の町割りが良く残っている。



【第4回青谷地域振興会議】

日本遺産～北前船寄港地・船主集落～ 青谷の魅力について

【日時】 令和元年8月26日（月）15:00～

◆宿場町潮津村から港町芦崎村へ

- 1 山名家住宅
- 2 潮津神社
- 3 旧山陰道 中町通り
- 4 鉤型辻
- 5 芦崎の町並み 八軒屋通り
- 6 芦崎湊と津出し路地
- 7 湊神社
- 8 青屋御蔵跡

◆港町芦崎村から本村青屋村へ

- 9 旧青屋川（旧勝部川）
- 10 興宗寺と十六羅漢さん

◆宿場町潮津村から港町芦崎村へ

1 山名家住宅



山名家は、屋号を亀屋と称し、廻船問屋を営んでいた。家の裏には、廻船が着いた当時の石垣が残っている。山名家の家屋は、江戸後期の建築（移築されたものか。家屋は右半分のみ現存）とされる。現在は空き家で子孫が管理している。

2 潮津神社



潮津村（現青谷地区）の氏神。もと王子権現と呼ばれ、大國主命と八上姫をまつが、明治元年、稲生大明神と菅原道真も合わせてまつている。境内には、天保6年（1835）、慶応2年（1866）作の灯ろうと、安政4年（1857）名石工「川六」作の狛犬がある。

3 旧山陰道 中町通り



東西に通る潮津村の中町通りは、江戸時代の山陰道（伯耆往来）であり、宿駅（飛脚の中継所）が置かれ、商家や旅籠が並ぶにぎやかな通りであった。明治から大正にかけては、郵便局や銀行、駐在所なども置かれ、青谷の中心であった。

明治後期に山陰本線青谷駅ができてからは、次第に駅前の方に中心が移って行った。



西本酒造場
銘柄「美人長」
家屋は明治期築
酒蔵は江戸末期築



山崎醸造本舗
明治期に麴製造で創業
現在、麴、味噌、
醤油を製造
銘柄「イナサ醤油」

4 鉤型辻



この辻は、江戸時代の地図にも載っている。鉤型辻は、城下町に見られる防備上のもので、敵に行き止まりと見せかけるねらいがある。港町青谷の場合は、廻船の発着場の関係で鉤型になっているのか？

5 芦崎の町並み 八軒屋通り



江戸時代、港町芦崎（現青谷地区）に本拠地をもつ8軒の富商の廻船問屋などが建ち並んでいた場所であるところから、字名として「八軒屋」の名がついている。8軒とは、金屋・関屋・鍵屋・大黒屋・舛屋・松屋・浜崎屋・米屋であり、廻船業などを営む芦崎を代表する商人たちで、近くの湊神社にそれぞれ1基または2基ずつ灯ろうを奉納している。この通りは、現在も、廻船業を営む船主集落の町割りが良く残っている。なお、芦崎には、他に夷屋、茶屋などがある。

6 芦崎湊と 津出し路地



芦崎湊（現青谷港）は、芦崎川（現勝部川下流）の河口を利用した天然の港である。すぐ西側に位置する丸山（標高69m）によって北西の風がさえぎられ、川岸に船舶が停泊しやすい条件を備えている。

安土桃山時代から江戸初期にかけて、この地を治めていた鹿野城主亀井茲矩が、東南アジアとの海外貿易である「朱印船貿易」を行うにあたり、その本拠地を長崎に定めた。その長崎と因幡との海上連絡に芦崎湊を使用していたことから、この湊は、この時代にはすでに重要な位置を占めていたといえよう。

芦崎村は、その後もこの川の東岸に沿って廻船問屋などの家々が連なる、漁業と海運に恵まれた港町として、明治の終わりごろまで繁栄した。現在も、廻船の積み荷を運んだ津出し路地や面影を残した町並みが残っている。

なお、芦崎湊から船積みされた商品は、木綿、紙、イタヤ貝、海産物、酒などがある。特に、木綿は「青谷木綿」の名で大坂市場で盛んに取り引きされた。

7 湊神社



狛犬うん形
1801年
花崗岩製

もとは「湊八幡宮」と称して、江戸時代は芦崎川（勝部川河口）西岸側にある丸山に鎮座していた。祭神は、品陀和氣命と武内宿禰。明治4年（1871）に現在地の八軒屋に移り、同5年芦崎村の村社となっている。

境内には、芦崎の商人たちが奉納した灯ろうが12基あり、最も古いものは明和4年（1767）8月の日付のもので、金屋治郎左衛門の名が刻まれている。芦崎はまさに廻船問屋などの富商の基地で、町はにぎわい活気にあふれていたことだろう。なお、狛犬も複数対あり、中に「航海安全」と刻まれた寛政13年（1801）に赤間関（現下関市）の商人（舛屋）から寄進されたものがある。



また、「おふね」と呼ばれる廻船型模型「八幡丸」の神輿が奉納されており、春季例祭（毎年4月第4日曜日）のときに本神輿の後に車台に乗せてひいた。

なお、湊神社南隣に嘉慶3年（1389）作で「阿弥陀三尊種子板碑」の供養塔「嘉慶の碑」（鳥取市指定保護文化財）がある。

8 青屋御蔵跡



現在の浜町簡易郵便局あたりに鳥取藩の施設として芦崎には「御蔵」があった。これは、藩の財政をまかなう年貢米を収納するところで、万治3年（1660）に設置された。この御蔵には、旧青谷町内の村々から年貢米が運び込まれた。御蔵には津出し御門があり、そこから津出し路地をとって廻船に米を運んだ。

なお、米蔵の建物の一部が現存している（旧石井医院）。

◆港町芦崎村から本村青屋村へ

9 旧青屋川（旧勝部川）



青屋村（現青谷地区）であった西町あたりを流れる青屋川（現勝部川）は、当時は今より西側を流れており、ちょうど興宗寺の東端が川に沿っていた。今も、川に面していた石垣がほぼ当時のままの姿であり、井手からの水路が走っている。この石垣は、名石工「川六」が造ったものと言われている。

現在の勝部川は、度重なる水害を受けて、昭和12年（1937）ごろようやく流路変更、改修されたものである。

10 興宗寺と十六羅漢さん



隆法山興宗寺は、曹洞宗の寺で、鹿野の譲伝寺の末寺。本尊は千手観世音菩薩像。寺の創立年、由緒は不詳であるが、転地すること4度とされ、弘治3年（1557）寂の譲伝寺第八世住職等鶴禅師が、現在の地に禅堂として建てた。当時の禅堂の残ってはいないが、本尊は本堂に安置されている。

当初、本堂は北向きに面していたが、現在は東向きとなっている。山門も以前は、北側の県道（旧山陰道）側にあったが、現在は東側にある。境内には、天保13年（1842）名石工「川六」作の「三界万霊等（塔）」（鳥取市指定保護文化財）がある。

山門を入り左脇に十六羅漢が安置されている。十六羅漢とは、永くこの世にあり正法を護持し衆生を導くという16人の羅漢のこと。それぞれの施主には、当時の芦崎の廻船問屋などがなっている。



* 『因幡誌』によると、芦崎は、青屋から分村した村、潮津はさらに芦崎から分村したものとある。土地の人は、芦崎を下青屋、潮津を上青屋と呼んだ。

青谷地域振興会議委員視察研修（案）

視察場所 兵庫県新温泉町諸寄地区

視察目的 昨年、鳥取市賀露・青谷地域は日本遺産「荒波を超えた男たちの夢が紡いだ異空間～北前船寄港地・船主集落～」に追加認定を受けました。今後の地域活性化に向けて、地域住民が中心となり北前船をテーマとした勉強会やガイド養成などを通じて、地域活性化に取り組んでいる新温泉町諸寄地区の活動状況等を視察します。

視察内容

- ①諸寄地区の見学：為世永神社、八坂神社、中藤田家等の見学
- ②諸寄歴史と文化を薫るまちづくり委員会からの活動状況等説明及び意見交換会

視察日程

青谷町総合支所発	10:00
新温泉町諸寄着	11:00
①諸寄地区内見学	11:00 ～ 12:00
昼食	12:00 ～ 13:00
②諸寄歴史と文化を薫るまちづくり委員会からの活動状況等説明 及び意見交換会	13:00 ～ 14:30
新温泉町諸寄発	14:30
青谷町総合支所着	15:30

視察日（案）

10月 16日（水）、17日（木）、 22日（火）、23日（水）、
24日（木）、25日（金） 計画中

※諸寄歴史と文化を薫るまちづくり委員会の都合で、見学及び説明を午前中に行うなど視察日程が変更する場合があります。

2 巡目国体に係る最近の動きについて

平成31年1月21日
スポーツ課

平成31年1月16日の日本スポーツ協会平成30年度第5回理事会において、鳥根県が2029年、鳥取県が2033年の国体(国民スポーツ大会)の開催申請書提出順序了解県として、それぞれ決定しました(いわゆる「内々定」)。また、これに先立ち同年1月15日には、鳥根県との協力開催のあり方を具体化させていくために、実務者レベルで協議していくための両県連絡調整会議を立ち上げました。

1 内々定までの動き

○平成30(2018)年

- 10月15日 2033年の2巡目国体招致を県議会全会一致で決議
- 11月12日 鳥根・鳥取両県知事協議(協力しながら準備をすすめることを確認)
- 11月13日 日本スポーツ協会及び文部科学省に国体開催要望書を提出(知事、教育長、県体協会長)
- 12月13日 日本スポーツ協会が国体委員会で、国民スポーツ大会(2023年から名称変更予定)を2029年は鳥根県、2033年は鳥取県で開催する方針を確認
- 12月25日 県内市町村との2巡目国体の開催に係る意見交換会(県)

○平成31(2019)年

- 1月15日 両県連絡調整会議の立ち上げ
- 1月16日 日本スポーツ協会理事会において、鳥根県(2029年)と鳥取県(2033年)が開催申請書提出順序了解県として決定

2 2巡目国体等に係る両県連絡調整会議の立ち上げ

〈第1回両県連絡調整会議〉

- 日時 平成31年1月15日(火)午後3時15分から午後4時45分
- 場所 鳥根県庁
- 出席者 【鳥取県】鳥取県地域振興部 太田 裕司 スポーツ振興監
鳥取県体育協会 後藤 裕明 専務理事 ほか
【鳥根県】鳥根県政策企画局 野津 建二 局長
鳥根県体育協会 安井 克久 専務理事 ほか
- 内容 協力開催のあり方について検討

①今後検討すべき事項について確認

- ・協力開催競技、会場
- ・人的体制のあり方
- ・その場合の費用負担
- ・競技力向上に係る連携

②両県の競技施設の現状等について意見交換

3 市町村との意見交換会

- 日時 平成30年12月25日(火)午後1時30分から午後2時45分
- 場所 倉吉体育文化会館
- 内容 これまでの動き、今後の想定スケジュール等の報告
意見交換等(競技会場の決定手順、施設整備の考え方について等)

4 今後の想定スケジュール

- 2019年(14年前)～ 実務者レベルで鳥根県と協力開催のあり方について協議を進める
(会場地、人的体制、経費負担等の考え方)

～以降～

- 2028年(5年前) 国民スポーツ大会(国スポ)開催申請書の提出(5年前)、鳥取国スポ開催の内定
- 2029年(4年前) 鳥根国スポ等開催
- 2030年(3年前) 鳥取国スポ等の開催決定、国スポ等実行委員会設立
- 2033年 鳥取国スポ等開催